

東日本大震災 日産婦災害派遣 報告書（順天堂グループ第3陣）

期間：2011年4月1日（金）～4月7日（木）

2011年4月9日

順天堂大学 依藤崇志 楠木総司

4月1日金曜日 22：30 東京駅八重洲口より復興支援バスとして運行されている夜行バスで仙台へ向けて出発。

4月2日土曜日 5：45分 仙台駅へ到着。日産婦で予約して頂いた JAL CITY HOTEL 仙台へ徒歩で向かう。6：15分チェックインした後、部屋で9：45分まで仮眠をとった。ホテル自体は4月1日より通常営業となり、朝食も4月2日より再開となっていた。仙台市内の大部分は依然ガスが通っていない状況であったがホテル内の使用(シャワー)は可能であった。朝食後チェックアウトし、10時30分タクシーで東北大学病院へ向かう。タクシーは難なく乗車ができた。11時東北大学病院へ到着し、宇都宮医局長に出迎えて頂いた。医局において、八重樫教授、室月教授と面会し、気仙沼の現況と現地で診療するにあたって留意すべきことをご説明頂いた。12時東北大学のマイクロバスで気仙沼へ向かう。

15時気仙沼市立病院到着。到着時お産が1件あり、宇賀神先生がお産対応をされていたため、重田先生に出迎えて頂いた。病棟、外来、医局の案内を受ける。エコー室と外来奥の休憩室に荷物を収容した。我々の到着と入れ違いに、重田医師に休養をとって頂いた。夜間の当直と外来が我々に求められている業務である旨、宇賀神先生から説明を頂いた。

到着時の気仙沼市立病院の状況は、外来診療は産婦人科など一部の科においてのみ再開の状況で、内科、外科、脳神経外科などはまだ再開されていなかった。(内科は処方のみ対応)しかし4月4日の全科外来再開を目指し、それを模索している状況であった。到着が土曜日であり、まだ食堂は再開されていなかったが、医局には各国よりの援助物資(ただしインスタント食品)が豊富に存在し、また握り飯、お味噌汁、お弁当なども支給されていた。我々も支給されたお弁当と持ち込んだ食料を食べた。

楠木がファーストコール。以前に気仙沼市立病院に勤務されていた八戸市民病院常勤の今井紀昭先生が陣中見舞いでいらっしゃり、その晩は宇賀神先生、今井先生と我々2人で夕飯を共にした。夜間救急外来1件、分娩1件であった。

4月3日 日曜日 午後より市内を散策し、気仙沼港へ向かう。町のヘドロはほぼ乾いており風に舞って飛散していた。マスクは必須で、町ですれ違った市民もほとんどがマスクを装着していた。病院寄りの道路は路肩にがれきが積まれており、車道は整備されており、家屋も浸水の被害がメインで、倒壊は目立たなかった。しかし港へ近づくに従い、状況は一変する。家屋は壊滅的被害で、区画など元の町並みを想像することも困難なほどであった。漁船、車などがひっくり返り、家屋の屋根や、家屋の中に突き刺さっている

た。ヘドロはまだ乾ききっておらず、また港の冷凍庫に保管されていたマグロやサンマが辺りに散乱し、異臭を放っていた。このような状況の中、大量の瓦礫と、風に舞った粉塵、化学薬品などにより高齢者の肺炎が急増している旨、院内で耳にした。またそれ以上に留意すべきこととして、気仙沼は古い家が多かったため、アスベストがかなり飛散している可能性があることが、水面下で徐々に問題になってきていた。

依藤ファーストコール。楠木は日産婦が用意して下さったビジネスホテル（山側に存在し、津波の被害は全く受けていない）に宿泊した。ホテルへはタクシーで向かうが、タクシーがつかまりにくいことはなかった。

4月4日月曜日 内科、脳神経外科を除いて一斉に外来再開となった。**内科は依然処方のみの対応だが受診者数は100人を超えていた。**（産婦人科はすでにその前の週より再開となっていた。）外来は、以前は産科がメインであったが、徐々に婦人科も増えてきていた。外来は午前のみで、この日は42人（産科妊婦健診18人 初期2人 KA希望2人 婦人科20人（中断していた診療の結果や再診））であった。その前の週は、近医の開業医が被災し産期管理が困難となったため、そこで管理されていた妊婦のほとんどが気仙沼市立病院へ引き継ぎとなったため、産科受診が多かったが、4月4日以降、産科は徐々に落ち着き、一方で地震によって中断していた婦人科診療の患者が戻ってきている状況であった。午後はアウスが1件。

病院内は職員食堂が再開。今までのおにぎり、味噌汁、弁当から、野菜炒め、焼き肉、海老フライなどの各定食に加え、牛丼、親子丼、カツ丼と食事の選択が一挙に増えることとなった。ただし麺類は当分の間は困難とのことであった。

ファーストコールは楠木。

4月5日火曜日 外来受診は46人。午後アウスが1件。分娩が2件。重田先生が休暇から戻られ、現場復帰された。ファーストコールは依藤。夜間救急外来1件。

4月6日水曜日 外来受診は37人。震災前の外来は、一日平均50人前後で、産科と婦人科が半々であった。4月4日以降の外来受診者の割合からも、徐々に婦人科患者が戻ってきており（婦人科の初診も数人いた）、院内全体も震災前の平静を確実に取り戻しつつあるような印象を受けた。実際に、4月4日の全科（内科や脳外科は除く）外来再開へ踏み切る前は、院内の常勤医の間でも意見が割れ時期尚早との声もあったようだが、それでも再開に踏み切ってみるとそれが病院復興への第一歩としてやって良かったと、常勤医達が口々に語っていた。このことと、食堂再開による食料事情の劇的改善が震災前の平静を取り戻すきっかけになっているようであった。

午後は山側の町を散策。午後4時、宇賀神先生、重田先生に見送られながら、気仙沼市立病院を後にし、マイクロバスで東北大学へ向かった。

18時半東北大学へ到着。宇都宮医局長に夕食をごちそうになり、23時東京へ向かって出発。

4月7日木曜日 6時東京駅丸の内口で下車。

展望

今後気仙沼市立病院には、我々と入れ違いで順天堂産婦人科第4陣が現地入りし、その後は大阪大学産婦人科が後に続き4月16日辺りまでカバーし、4月16日からは東北大学が1名ずつ派遣するとのこと。外来患者の数と現況の分娩件数では、非常に有能である2名の常勤医と東北大学から派遣される1名で十分まかなえと考えられる。分娩件数は、気仙沼市内の産科開業医の被災に伴い、震災前月30件の分娩件数が、20件上乘せされ50件になる見通しであり、これに対しても3人体制で対応は可能と思われる。気仙沼に関してはこの様に、ある程度のめどが立ってきているが、東北大学は石巻や気仙沼のような災害の第一線となった施設だけでなく、それらの後方施設も多く、東北6県に関連病院を持つ。震災当初はむしろそれら後方施設の方が、人手が足りなかったようであるが、現在はそれも徐々に改善されつつあるとのことであった。今回の派遣は、まだ災害急性期における救援派遣であったが、今後は中長期的な支援として、刻々と変わっていく医療状況に対して、東北大学の意向に十分に配慮し、仮に要請があれば後方施設を含めた人的サポートもその一つと考えられる。その際には、卒後10年以上の経験ある産婦人科よりも、専門医取得前後の若手の方が、支援に伺った側としても、また支援を受け入れる側としても、お互いが過度に気を遣わずにやりやすいと思われる。最後にこのような機会を与えて頂きありがとうございました。